

「集積の中から生まれる、無との対話」

横溝美由紀の彫刻的絵画世界

横溝美由紀の作品を最初に目撃したのは、今から約15年前の2002年のこと。東京都現代美術館でのSAISON ART PROGRAM「傾く小屋 - 美術家たちの証言」展だ。石鹼を型取りして着色した樹脂性のフェイクな石鹼インスタレーションを出品していた。石鹼に彩色された透明感あふれる、まがいものの石鹼の色彩が会場空間全体を包み込み、異次元空間を生み出していた。当時、年間に300本以上の展覧会を観ていた私だが、ほとんど作品は忘却の彼方である。しかし、横溝のインスタレーションは、私の記憶の引き出しに大切にしまってあったようで、よく覚えている。

次に横溝作品に出会ったのが05年。京都造形芸術大学のギャルリ・オーブでの個展「横溝美由紀展invisibility」を観て、朝日新聞大阪本社版の文化欄「美術」に取りあげた。写真やオブジェなど4点からなる光と闇の世界を対比する巨大インスタレーションを発表していた。この時の印象は「この光と闇の美しい空間には、世界の構成要素である空間と時間と光が映し出されているように見える。宇宙空間が持つ光と闇の世界を見事に視覚化したといえよう。」と記した。この頃の横溝作品の特徴として際立つものは、光と空間の関係における物質の透過性や透明性であろう。

これまで時間・空間と光にこだわったインスタレーション作品を得意とし展開してきた彫刻家の横溝美由紀。今回、彼女が挑むものは平面作品だ。平面という形式は絵画といえるが、横溝はそれを彫刻だと断言する。平面的な絵画といえども物質。彫刻を制作する方法論と同様な手法で形作る絵画は彫刻となる。横溝の場合、描くというよりは積み上げて行く行為の集積といえる。水平と垂直の無数の線の交わる場。色彩を持つ線の重なりが網目状となって面を形づくる作品は、時間を封じ込め、あらたな空間を創造する。その緊張感あふれる画面に空気の震えを感じる。一見、禁欲的にみえる画面は、近距離で観て行くと絵の具の飛沫が盛り上がり表情豊かな画面となっている。離れてみる、近づいてみる、鑑賞者と作品の距離によって作品の印象が異なる。

一本の糸に油絵の具をまとわせ、糸を手で弾くことによって、キャンバスや紙といった支持体に絵の具が定着する。その糸は、縦糸と横糸が折り重なる水平と垂直を示し、まるでつづれ織りのような作業の中で絵画が編み込まれる。時間と行為の痕跡の刻印された画面からは、驚くべき数々の線が重層する。ひたすら糸を弾く行為は、修道女のようなものではないか。その行為と自らの身体性が重なり合い呼応する時、無の時間が広がり彼女を包み込む。描くわけでもないイメージを定着するわけでもない、筆を使わず手が画面に触れる事もない。膨大な時間の中で生まれる「無との対話」という行為の痕跡と積み重ねがやがて作品となる。それを彼女の呼吸といってもさしつかえないだろう。

それらの作品群を観た時、過去に観た彼女のインスタレーションを平面に置き換えて、再構築しているような印象を受けた。空間と時間の関係性を視覚で読み解くという試みを平面と時間の関係に置き換えて実験しているようだ。

今回の個展では、ギャラリーの壁面を支持体として天井から床に一本の垂直な糸の痕跡を示す絵の具の飛沫と垂直線が壁に残っていた。既存の矩形の支持体に頼らず、空間そのものを支持体とした見事なインスタレーションだ。たった5本の垂直線と絵の具の飛沫は、絵画という名の彫刻のたたずむ場所あるいは空間ともいえはしまいか。近年インスタレーションは「関係性のアート」として息づき、今日では鑑賞者との体験型、参加型の作品、あるいは装置として機能し流行しているが、横溝はそれを善としない、というよりは、「関係性のアート」に馴染まない自らに気付く。作品として完結し自律することを求めるからか。自らの世界の中に他者の介入を許さない強さが彼女の作品から感じ取れる。大地にしっかりと根付き、その立ち位置を決め、揺るがない覚悟。また一方、無自覚な意識の中で生まれる彼女自身の深層心理の世界が吹き出したともいえる。イリュージョンが展開する絵画空間に、その物質性と時間を封じ込めたのが、横溝美由紀の彫刻的絵画世界だといえよう。

加藤義夫(キュレーター/美術評論家)